

ヘーゲル『精神現象学』「序説」第51節～第54節の解明

著者	山口 誠一
出版者	法政大学文学部
雑誌名	法政大学文学部紀要
巻	82
ページ	19-32
発行年	2021-03-15
URL	http://doi.org/10.15002/00024067

ヘーゲル『精神現象学』「序説」

第 51 節～第 54 節の解明

山 口 誠 一

はじめに

第 51 節では、第 50 節を受けて、形式主義批判がなされる。当時のシェリングやシェリング派の考え方を形式主義ということでパターン化しているので、固有名は出てこない。このパターンでは、形式と内容は別々で、形式が内容にそこから適用される。これに対して、第 53 節と第 54 節でのヘーゲルの考え方では、内容から内的必然性によって形式が規定として生ずる。

【ヘーゲル『精神現象学』「序説」第 51 節～第 54 節要旨・邦語訳・注解】

《第 51 節》

要 旨

直観による感性的規定の述定が形式主義では構成となる。形式主義では、形式が内容にそこから適用される。形式主義では、病気は内容に関係なく三つの形式に分類される。自然哲学の形式主義では、静止した感性的事物に概念が結びつけられるが、概念そのものは解明されない。しかし、無経験な人々は、驚嘆しわが身を祝福する。述語をくり返し用いる手管はやりきれない。形式主義は単調であり、その道具立ても安易である。外的形式で規定する快適さと卓効の自負が相互に支え合っている。形式主義の一覧表は、事物の本質を除去したり隠したりしている。多彩な世界を絶対的の同一性は、白一色に描いてしまう。図式、絶対的の同一性、一方から他方への移行はいずれもそこからの悟性である。

(1) 直観による感性的規定の述定が形式主義では構成となる。

Statt des inneren Lebens und der Selbstbewegung seines Daseins wird nun eine solche einfache Bestimmtheit von der Anschauung, d. h. hier dem sinnlichen Wissen, nach einer oberflächlichen Analogie ausgesprochen und diese äußerliche und leere Anwendung der Formel die *Konstruktion* genannt.

ところで、内的な生命や、その定在による自己運動のかわりに、直観の、といってもここでは感性的知の、こうした単純な規定が、表面的な類推にまかせて語られる。そして、公式を、あのそこから空虚

な仕方でも適用してゆくことが、構成と呼ばれている。

《注解》 この節で、「内的な生命や、その定在による自己運動」という命題形式と結びついた命題内容が暗に表明されている。

(2) 形式主義では、形式が内容にそとから適用される。

—Es ist mit solchem Formalismus derselbe Fall als mit jedem.

— この場合にかぎらず、形式主義というものはすべて同じようなものである。

《注解》 内容にとって形式がそとから適用されるということでは形式主義は同じようなものなのである。

(3) 形式主義では、病気は内容に関係なく三つの形式に分類される。

Wie stumpf müßte der Kopf sein, dem nicht in einer Viertelstunde die Theorie, daß es asthenische, sthenische und indirekt asthenische Krankheiten und ebenso viele Heilpläne gebe, beigebracht und der nicht, da ein solcher Unterricht noch vor kurzem dazu hinreichte, aus einem Routinier in dieser kleinen Zeit in einen theoretischen Arzt verwandelt werden könnte?

病気には「無力症」と「強力症」と「間接的無力症」とがあり、それと同じ数の治療法がある、という理論を15分で覚え込めないとすれば、そして、最近まではこの程度教われれば十分だったわけで、この短時間のうちに町医者から一変して医学理論家になれないとすれば、よほど愚鈍な頭にちがいないというわけである。

《注解》 形式主義では、病気の内容に関係なく、三つの病気形式のうちのいずれかを適用すれば、医学理論として十分なことになる。

(4) 自然哲学の形式主義では、静止した感性的事物に概念が結びつけられるが、概念そのものは解明されない。しかし、無経験な人々は、驚嘆しわが身を祝福する。

Wenn der naturphilosophische Formalismus etwa lehrt, der Verstand sei die Elektrizität oder das Tier sei der Stickstoff, oder auch *gleich* dem Süd oder Nord usw., oder repräsentiere ihn, so nackt, wie es hier ausgedrückt ist, oder auch mit mehr Terminologie zusammengebraut, so mag über solche Kraft, die das weit entlegen Scheinende zusammengreift, und über die Gewalt, die das ruhende Sinnliche durch diese Verbindung erleidet und die ihm dadurch den Schein eines Begriffs erteilt, die Hauptsache aber, den Begriff selbst oder die Bedeutung der sinnlichen Vorstellung auszusprechen, erspart, —es mag hierüber die Unerfahrenheit in ein bewunderndes Staunen geraten, darin eine tiefe Genialität verehren sowie an der Heiterkeit solcher Bestimmungen, da sie den abstrakten Begriff durch Anschauliches ersetzen und erfreulicher machen, sich ergötzen und sich selbst zu der geahnten Seelenverwandtschaft mit solchem herrlichen Tun Glück wünschen.

——また自然哲学での形式主義が教えることと言えば、たとえば悟性は電気であるとか、動物は窒素であるとか、あるいは動物は南や北などに等しくもあるとか、それを代表するとかいったことである。ただ、この言い方のようにむきだしで表現されるとはかぎらず、もっと術語をたくさん仕込んでも語られることもある。とにかくこうして、たがいに遠く離れていると見えるものをいっしょに捉える力量のほどが示されようというわけで、静止的な感性的事物にこうした結びつきが無理強いされることにより、それに概念のような外観が与えられる。が、その実、当の概念そのものを、あるいは感性的表象の意味を表明するという、肝心なことはなされない。しかし無経験な人々は、形式主義のこのやり方にすっかり驚嘆させられ、そこに深い天才的なところを認めて敬意をはらう。しかも、そこでは抽象的概念が直観的なものによっておきかえられ、より楽しいものにされているので、そのような規定の仕方の明朗さに人々はうれしくなってしまう、かくもすばらしい事業と自分の魂がかよいあう思いに、わが身を祝福するという始末である。

《注解》 ここでは、シェリング派の自然哲学が批判されている。

(5) 述語をくり返し用いる手管はやりきれない。

Der Pfiff einer solchen Weisheit ist so bald erlernt, als es leicht ist, ihn auszuüben; seine Wiederholung wird, wenn er bekannt ist, so unerträglich als die Wiederholung einer eingesehenen Taschenspielerkunst.

こうした知恵の手管は、すぐに覚えこむことができるし、使いこなすのもたやすいことである。その手管に通曉すると、それをくり返し見せつけられるのは、種も仕掛もわかっている手品がくり返されるのと同様、やりきれないものである。

《注解》 形式主義は、感性的事物に述語をくり返し用いて、内容に内在することがない。

(6) 形式主義は単調であり、その道具立ても安易である。

Das Instrument dieses gleichtönigen Formalismus ist nicht schwerer zu handhaben als die Palette eines Malers, auf der sich nur zwei Farben befinden würden, etwa Rot und Grün, um mit jener eine Fläche anzufärben, wenn ein historisches Stück, mit dieser, wenn eine Landschaft verlangt wäre.

こうした形式主義の単調さ、その道具立てをとりあつかうことの容易さ、それはちょうど、画家がパレットの上に赤と緑の二色の絵具だけをのせ、歴史画が求められれば赤で、風景画が求められれば緑で、カンヴァスに色をつけるというのと、同じようなものである。

《注解》 ここで、ヘーゲルがおそらく問題としているのは、画題の内在的特質を無視して歴史や風景次元だけで色彩を決めているように、形式主義も一定の概念の道具立てしか扱わないことである。

(7) 外的形式で規定する快適さと卓効の自負が相互に支え合っている。

—Es würde schwer zu entscheiden sein, was dabei größer ist, die Behaglichkeit, mit der alles, was im Himmel, auf Erden und unter der Erden ist, mit solcher Farbenbrühe angetüncht wird, oder die Einbildung auf die Vortrefflichkeit dieses Universalmittels; die eine unterstützt die andere.

— 実際その場合に、一方では、「天にあるもの、地上にあるもの、大地の下にあるもの、ことごとく」を、こうした絵具で塗りたてることの快適さがあり、他方では、この形式主義的万能薬の卓効についての自負があって、どちらが主になっているかを決めるのは困難であろうが、要はたがいに支え合っているのである。

《注解》 形式主義を支える快適さと自負が痛烈に批判されている。

(8) 形式主義の一覧表は、事物の本質を除去したり隠したりしている。

Was diese Methode, allem Himmlischen und Irdischen, allen natürlichen und geistigen Gestalten die paar Bestimmungen des allgemeinen Schemas aufzukleben und auf diese Weise alles einzurangieren, hervorbringt, ist nichts Geringeres als ein sonnenklarer Bericht über den Organismus des Universums, nämlich eine Tabelle, die einem Skelette mit angeklebten Zettelchen oder den Reihen verschlossener Büchsen mit ihren aufgehefteten Etiketten in einer Gewürzkrämerbude gleicht, die so deutlich als das eine und das andere ist und die, wie dort von den Knochen Fleisch und Blut weggenommen, hier aber die eben auch nicht lebendige Sache in den Büchsen verborgen ist, auch das lebendige Wesen der Sache weggelassen oder verborgen hat.

天上のものも地上のものも、自然の諸形態も精神の諸形態もひっくるめた、一切に対して、一般的図式からとってきた二つ三つの規定をはりつけ、こうして一切を配列してしまうこの方法、それが産み出すものは何かとなれば、いわく「宇宙の機構についての日のごとく明らかなる報告」、これ以下のものではないいけないわけである。ところがこの報告たるや、一覧表にはかならない。それも、諸部分の名札はあってある骸骨か、あるいは香料屋の店先に、レッテルをつけて並べてある密封された小箱の列みtainなもので、たしかに明らかさにかけてはいずれも劣らぬ。そして骸骨の場合に肉と血がとりさってあり、密封箱の場合にも、なかに隠されているのは生きていない物品であるように、この一覧表は、事物の生きた本質をとりのぞいたり、隠したりしてできている。

《注解》 最後に言われているように、形式主義は、事物の本質を死んだものになっている。

(9) 多彩な世界を絶対的同一性は、白一色に描いてしまう。

—Daß sich diese Manier zugleich zur einfarbigen absoluten Malerei vollendet, indem sie auch, der Unterschiede des Schemas sich schämend, sie als der Reflexion angehörig in der Leerheit des Absoluten versenkt, auf daß die reine Identität, das formlose Weiße, hergestellt werde, ist oben schon bemerkt worden.

世界を描くこの手法は、同時に完成されると一つの色しか用いない絶対的画法にゆきつく。なぜかという、この手法においては、図式の中で区別が出てくることさえ恥とされ、区別はすべて反省によるものだというので、それは絶対者の空虚へ沈められるからである。こうして、けっきょく、純粋な同一性、何も形のない白一色、つまり空白になってしまう。このことは前にも述べておいた。

《注解》 ここでは、シェリング派の絶対的同一性を、絶対的画法に喩えて批判している。

(10) 図式、絶対的同一性、一方から他方への移行はいずれもそとからの悟性である。

Jene Gleichförmigkeit des Schemas und seiner leblosen Bestimmungen und diese absolute Identität, und das Übergehen von einem zum andern, ist eines gleich toter Verstand als das andere und gleich äußerliches Erkennen.

一方の、図式とその生気のない諸規定における色彩の単調さ、他方の絶対的同一性、そして一方から他方への移行、これらはいずれも、死んだ悟性によるものであり、そとからの認識という点で、等しく他の認識なのである。

《注解》 そとからの認識としての死んだ悟性は、否定性としての生き生きとした悟性とは区別される。

《第52節》

要 旨

卓越した形式から生命が奪われる運命を被った。さらに形式が普遍的で規定的なものに仕上げられて卓越したものが完成される。

(1) 卓越した形式から生命が奪われる運命をこうむった。

Das Vortreffliche kann aber dem Schicksale nicht nur nicht entgehen, so entlebt und entgeistert zu werden und, so geschunden, seine Haut vom leblosen Wissen und dessen Eitelkeit umgenommen zu sehen.

しかしながら、あの卓越したものも以下の運命を避けえなかったというだけのことなのではない。あのものはかくも生命をうばわれ、精神をぬきとられ、皮をはがれてその皮を、生命のない知識とその虚栄が身にまとう、という目にあってきた。

《注解》 卓越したものは、形式であり、それが、内容の生命と切り離される運命をこうむったことを説明している。

(2) さらに形式が普遍的で規定的なものに仕上げられて卓越したものが完成される。

Vielmehr ist noch in diesem Schicksale selbst die Gewalt, welche es auf die Gemüter, wenn nicht auf Geister ausübt, zu erkennen, sowie die Herausbildung zur Allgemeinheit und Bestimmtheit der

Form, in der seine Vollendung besteht und die es allein möglich macht, daß diese Allgemeinheit zur Oberflächlichkeit gebraucht wird.

むしろこの運命そのものをこうむりながら、強制力が認められなければならない。まさにその強制力を通じて、卓越したものが、人々の、精神に対してではないにせよ、心情に対して働きかける。それとともに認められなければならないのは、形式というものが、普遍的で規定的なものへ仕上げられていったことである。あの卓越したものが完成されるのはこのことにおいてなのであり、そうであればこそこうした普遍性が、皮相的な仕方にもせよ、人々に用いられることにもなりえたのである。

《注解》 形式は、内容の生命を通じて普遍的かつ規定的になるものであり、形式主義にはそれが欠落している。

《第53節》

要 旨

概念形式の生命内容によって学が組織される。図式では外的な諸規定性も学では自己運動する魂である。自己否定と自己還帰が存在するものの運動である。当該の自己運動は、否定性である。学では形式の内容が自己規定し、全体の契機となる。形式主義の「一覧表を作る悟性」には、内容の必然性と概念についての洞察がない。形式主義の図式は内容目次であって内容の魂ではない。図式化する悟性は、定在にそこから属性をつけるのであって、定在に内在する規定性を認識しない。形式的悟性は、定在に内在しない。形式的悟性は個々の定在を見ていない。学的認識では、対象の内的必然性を表明することが要求される。学的認識は、対象内容へ沈潜する。内容が自己へ還帰すると単純な規定となり、全体が浮き出てくる。全体は、内容から反省還帰する。

(1) 概念形式の生命内容によって学が組織される。

Die Wissenschaft darf sich nur durch das eigene Leben des Begriffs organisieren;
学が組織されるには、ただ、概念それ自身の生命にまかせさえすればよいのである。

《注解》『論理学』体系は、特定の概念形式の内容が弁証法的に運動する際の生命によっている。

(2) 図式では外的な諸規定性も学では自己運動する魂である。

in ihr ist die Bestimmtheit, welche aus dem Schema äußerlich dem Dasein aufgeklebt wird, die sich selbst bewegende Seele des erfüllten Inhalts.

図式による場合はそこから定在にはりつけられる諸規定も、学では、充実した内容の魂としてみずから自身運動してゆく。

《注解》 諸規定とは形式であるから、学では、形式が自己運動する。

(3) 自己否定と自己還帰が存在するものの運動である。

Die Bewegung des Seienden ist, sich einesteils ein Anderes und so zu seinem immanenten

Inhalte zu werden; andernteils nimmt es diese Entfaltung oder dies sein Dasein in sich zurück, d. h. macht sich selbst zu einem *Momente* und vereinfacht sich zur Bestimmtheit.

その際、存在するものがどう運動してゆくかという、それは、一方では、みずから自分に対して他であるものとなり、他者に内在する内容となる。他方では、存在するものはこの展開された自分の定在を、自分の内へ取りもどす。ということは、すなわち、自分自身をそこで一つの契機たらしめ、自分を単純化して一つの規定性とする。

《注解》形式の自己否定は、存在するものから他在しない己れの定在を生み出し、その他在の魂となる。そして、その他在をさらに否定し、自己へ還帰し、ここで単純な規定性となる。

(4) 当該の自己運動は、否定性である。

In jener Bewegung ist die *Negativität* das Unterscheiden und das Setzen des *Daseins*; in diesem Zurückgehen in sich ist sie das Werden der *bestimmten Einfachheit*.

一方の運動では、否定性は、定在が区別し、設定する働きである。他方の、自己還帰の運動では、否定性は、規定された単純性が生ずることである。

《注解》ここで、内容の自己運動する魂が否定性であることが判明する。

(5) 学では形式の内容が自己規定し、全体の契機となる。

Auf diese Weise ist es, daß der Inhalt seine Bestimmtheit nicht von einem anderen empfangen und aufgeheftet zeigt, sondern er gibt sie sich selbst und rangiert sich aus sich zum *Momente* und zu einer Stelle des Ganzen.

このようにして内容は、その規定性が何か他のものから受けとられ、そこからあてがわれたのではないことを明らかにしている。むしろ内容が自分自身に規定性を与えるとともに、みずから進んで自分を契機となし、全体の中に位置をしめるのである。

《注解》形式主義と学を区別するのは、形式に内在する内容が形式としての規定性を他在として産出し、全体の契機とするかどうかということである。

(6) 形式主義の「一覧表を作る悟性」は、内容の必然性と概念についての洞察をもっていない。

Der tabellarische Verstand behält für sich die Notwendigkeit und den Begriff des Inhalts, das, was das Konkrete, die Wirklichkeit und lebendige Bewegung der Sache ausmacht, die er rangiert, oder vielmehr behält er dies nicht für sich, sondern kennt es nicht; denn wenn er diese Einsicht hätte, würde er sie wohl zeigen.

これにひきかえ、一覧表を作る悟性のやり方は、内容の必然性と概念を、すなわち、その悟性が配列する事物の具体性・現実性と生きた運動とをなしているところのものを、自覚してとっておく。あるいは、むしろ、それを自覚してとっておくことも実はしていないのであって、その見識もない。なぜな

ら、もしこの悟性が、このことを洞察しているのならば、その洞察を示すはずだからである。

《注解》形式主義は「一覧表を作る悟性」とされ、内容の必然性と概念についての洞察を持っていない。そして、「内容の必然性と概念」は「事物の具体性・現実性と生きた運動」とされている。

(7) 形式主義の図式は内容目次であって内容の魂ではない。

Er kennt nicht einmal das Bedürfnis derselben; sonst würde er sein Schematisieren unterlassen oder wenigstens sich nicht mehr damit wissen als mit einer Inhaltsanzeige; er gibt nur die Inhaltsanzeige, den Inhalt selbst aber liefert er nicht.

この悟性にはあいかわらずこの洞察が必要だという見識がけっしてない。関知しているのならば、図式を作ることはやめている。少なくとも、図式を作ることでもって、内容目次を作る場合以上に得意がることはもはやない。実際、この悟性が与えるものは内容目次にすぎないのであって、内容そのものは提供しない。

《注解》ここから、形式主義の図式が、内容の魂とは関係がないことが判明する。

(8) 図式化する悟性は、定在にそこから属性をつけるのであって、定在に内在する規定性を認識しない。

—Wenn die Bestimmtheit, auch eine solche wie z.B. Magnetismus, eine an sich konkrete oder wirkliche ist, so ist sie doch zu etwas Totem herabgesunken, da sie von einem anderen Dasein nur prädiert und nicht als immanentes Leben dieses Daseins, oder wie sie in diesem ihre einheimische und eigentümliche Selbsterzeugung und Darstellung hat, erkannt ist.

—この悟性の立場では、規定性は、たとえば磁気体制というような、それ自体として具体的で現実的なものの場合にも、やはり死んだものになり下がっている。なぜならば、その規定性は、何か別の定在に述語としてつけられているだけであって、当の定在に内在する生命として認識されてはいないからである。言いかえれば、当の定在の中で、その規定性が、いかに本来の固有の仕方で自分を産み出し提示してゆくか、が認識されていないからである。

《注解》ここで、図式化する悟性では、基体と外的属性という命題観が前提され、思弁哲学では、主語に内在する自己産出し、体系を提示する規定性という命題観が前提されている。

(9) 形式的悟性は、定在に内在しない。

Diese Hauptsache hinzuzufügen, überläßt der formelle Verstand den anderen.

これこそ肝心の事柄であるが、それを付け加えることを形式的悟性は他人まかせにしている。

《注解》本節(5)で「一覧表をつくる悟性」と言われたのが、ここでは「形式的悟性」といわれている。この悟性は、定在の内容に内在して規定性を得ることをしないのである。

(10) 形式的悟性は個々の定在を見ている。

—Statt in den immanenten Inhalt der Sache einzugehen, übersieht er immer das Ganze und steht über dem einzelnen Dasein, von dem er spricht, d. h. er sieht es gar nicht.

この形式的悟性は、事象の内在的な内容に立ち入るかわりに、いつも全体を見渡しており、個々の定在について話していながら、自分は当のものを越えたところに立っている。要するに、個々の定在をまったく見えてはいないのである。

《注解》 事象の内在的内容とは個々の定在であり、それに全体が対置されている。

(11) 学的認識では、対象の内的必然性を表明することが要求される。

Das wissenschaftliche Erkennen erfordert aber vielmehr, sich dem Leben des Gegenstandes zu übergeben oder, was dasselbe ist, die innere Notwendigkeit desselben vor sich zu haben und auszusprechen.

しかし、学的認識でむしろ要求されるのは、対象の生命に身をゆだねることなのである。あるいは、同じことだが、対象の内的必然性を目の前に据え、それを言い表すことである。

《注解》 対象の生命とは、内的必然性であることが明言されている。

(12) 学的認識は、対象内容へ沈潜する。

Sich so in seinen Gegenstand vertiefend, vergißt es jener Übersicht, welche nur die Reflexion des Wissens aus dem Inhalte in sich selbst ist.

学的認識は、このように対象に沈潜することによって、例の見渡しを忘れてしまう。というのも、見渡しというのは、知識がその内容から自分自身へ帰ってきている還帰にはかならないからである。

《注解》 対象内容への沈潜と対象内容から自己への還帰が対比されている。後者は、対象へ沈潜することなく対象をそこから見渡している。

(13) 内容が自己へ還帰すると単純な規定となり、全体が浮き出てくる。

Aber in die Materie versenkt und in deren Bewegung fortgehend, kommt es in sich selbst zurück, aber nicht eher als darin, daß die Erfüllung oder der Inhalt sich in sich zurücknimmt, zur Bestimmtheit vereinfacht, sich selbst zu *einer* Seite eines Daseins herabsetzt und in seine höhere Wahrheit übergeht.

もちろん学的認識は、素材の中に身を沈め、素材の運動とともに進んでゆきながらも、やがて自分自身のうちに立ち帰ってくる。しかしそうなるのは、そこでとりあつかわれていた充実した内容そのものが、ふたたび自分を自分のうちに取りもどし、単純化されて一つの規定となり、己れ自身を自分の定在における一つの側面へひき下げ、こうしてより高次の己れの真理へ移ってゆく、という、このことにおいてであり、それ以前ではない。

《注解》 学的認識は、素材の中に身を沈めることによって、素材の運動と一致する。そうすると、素材そのものが己れに還帰し、単純な規定となる。そうすると、単純な規定が、定在の一つの側面となり、全体が浮き出てくる。

(14) 全体は、内容から反省還帰する。

Dadurch emergiert das einfache sich übersehende Ganze selbst aus dem Reichtume, worin seine Reflexion verloren schien.

内容の豊かさにあっては反省還帰が失われていたように見えたが、このようにして当の豊かさから、自分を見渡す単純なる全体そのものが立ち現われるのである。

《注解》 「自分を見渡す単純なる全体そのもの」は、そこから形式的規定として内容に貼り付けられるのではなくて、内容の豊かさから反省還帰するのである。

《第54節》

要 旨

内容は、主体であることによって自己へ還帰する。実体とは自己同等性である。悟性的思考は、抽象である。自己同等性としての質によって定在は自立して存在する。定在は思考対象なのである。思想としての定在は、思考としての存在の概念把握である。定在存続の真理は生成である。知ることは、客観と関係のない主観ではない。知る働きは、策略である。

(1) 内容は、主体であることによって自己へ還帰する。

Dadurch überhaupt, daß, wie es oben ausgedrückt wurde, die Substanz an ihr selbst Subjekt ist, ist aller Inhalt seine eigene Reflexion in sich.

さきにも述べたように、そもそも、実体はそれ自身において主体なのであるから、すべての内容は、己れへの己れ自前の反省還帰である。

《注解》 実体の主体化とは、内容が己れへと反省還帰することである。

(2) 実体とは自己同等性である。

Das Bestehen oder die Substanz eines Daseins ist die Sichselbstgleichheit; denn seine Ungleichheit mit sich wäre seine Auflösung.

ある定在が存続していること、すなわち、それが実体であることは、自己同等であることである。なぜならば、己れと不同なのであれば、その定在は解体されるからである。

《注解》 実体を存続そして自己同等性と言い換えることによって、自己不等性そして自己否定を導出しようとしている。

(3) 悟性的思考は、抽象である。

Die Sichselbstgleichheit aber ist die reine Abstraktion; diese aber ist das *Denken*.

ただし、自己自身との同等性ということは純粹の抽象である。ただしこのような抽象が、思考である。

《注解》ここでの思考は悟性的思考であろう。

(4) 自己同等性としての質によって定在は自立して存在する。

Wenn ich sage *Qualität*, sage ich die einfache Bestimmtheit; durch die Qualität ist ein Dasein von einem anderen unterschieden oder ist ein Dasein; es ist für sich selbst, oder es besteht durch diese Einfachheit mit sich.

質というのは単純な規定性のことであるが、質によって、ある定在は他の定在から区別され、一つの定在である。定在は、それ自身だけでそれとしてある。すなわち、自らと一つであるこの単純性によって成り立っている。

《注解》自己同等性は、「自らと一つであるこの単純性」あるいは「単純な規定」と言い換えられて、質とされる。そして、その質が、他の定在から区別されるある定在の自立性である。

(5) 定在は思考対象なのである。

Aber dadurch ist es wesentlich der *Gedanke*.

そして、このおかげで定在は本質的に思想なのである。

《注解》思想とは、思考の対象であるから、定在は思考の対象なのである。

(6) 思想としての定在は、思考としての存在の概念把握である。

—Hierin ist es begriffen, daß das Sein Denken ist; hierin fällt die Einsicht, die dem gewöhnlichen begrifflosen Sprechen von der Identität des Denkens und Seins abzugehen pflegt.

—存在は思考であるということが、ここで概念把握されている。ここで得られるべき洞察は、人々が俗に思考と存在との同一性について概念的に把握することなく語る場合、欠けているのが常である。

《注解》思想が思考であり、定在が存在であるということが概念把握である。

(7) 定在存続の真理は生成である。

—Dadurch nun, daß das Bestehen des Daseins die Sichselbstgleichheit oder die reine Abstraktion ist, ist es die Abstraktion seiner von sich selbst, oder es ist selbst seine Ungleichheit mit sich und seine Auflösung, —seine eigene Innerlichkeit und Zurücknahme in sich, —sein Werden.

—このように、定在が成り立っているということが、自分自身との同等性であり、純粹の抽象であ

るため、それはまた、定在が自分を自分自身から抽象し、引き離していることでもある。したがって、定在が成り立つことは、それ自体、定在が自分と不同であることを意味し、その解体をまねく。すなわち、定在固有の内面性が現われ、定在は自分の内に取りもどされる。ということは、定在が生成することである。

《注解》 定在存続の真理は生成である。その生成は、自己同等性にして自己不等性なのである。

(8) 知ることは、客観と関係のない主観ではない。

—Durch diese Natur des Seienden, und insofern das Seiende diese Natur für das Wissen hat, ist dieses nicht die Tätigkeit, die den Inhalt als ein Fremdes handhabt, nicht die Reflexion-in-sich aus dem Inhalte heraus;

存在するもののこのような本性のおかげで、そして、知ることによって存在するものにこのような本性があるかぎり、知るということは、自分に疎遠なものとして内容を取りあつかう働きではなく、内容から離れて自分の内に向かう反省還帰でもない。

《注解》 定在が生成であるかぎり、知ることは、内容から疎遠で無関係な主観ではない。

(9) 知る働きは、客観でありつつ主観でもある。

die Wissenschaft ist nicht jener Idealismus, der an die Stelle des *behauptenden* Dogmatismus als ein *versichernder Dogmatismus oder der Dogmatismus der Gewißheit seiner selbst* trat; sondern indem das Wissen den Inhalt in seine eigene Innerlichkeit zurückgehen sieht, ist seine Tätigkeit vielmehr sowohl versenkt in ihn, denn sie ist das immanente Selbst des Inhalts, als zugleich in sich zurückgekehrt, denn sie ist die reine Sichselbstgleichheit im Anderssein;

学というものは、いきなり対象にかんして主張するだけの独断論であってはならないが、さりとて、そのかわりに登場してきた確かさをふりまわす独断論、あるいは自分自身の確実に固執する独断論であるところの、例の観念論ではないのである。知識は、内容がそれ自身の内面に帰ってゆくを見るのであったが、そのさい、知る働きは、一方では内容の中に沈められていると同時に、他方では自分のうちに帰っている。それが内容の中に沈み込んでいるのは、内容の内在的自己にほかならないからである。自分のうちに帰っているというわけは、それが、他者的存在でありつつ純粋な自己同一だからである。

《注解》 内容を知る働きが、内容の内在的自己として客観的であると同時に主観として純粋な自己同一でもある。

(10) 知る働きは、策略である。

so ist sie die List, die, der Tätigkeit sich zu enthalten scheinend, zusieht, wie die Bestimmtheit und ihr konkretes Leben darin eben, daß es seine Selbsterhaltung und besonderes Interesse zu

treiben vermeint, das Verkehrte, sich selbst auflösendes und zum Momente des Ganzen machendes Tun ist.

したがって、知る働きというものは策略である。それは、自分では働きをやめるように見せかける。そして、ある規定をもつものの具体的生命が、自分を保存しようとして特殊な関心を追っているつもりでいるけれども、まさにその為すことによって実は逆のことが起こっており、当のものが自分自身を解体して全体の一契機となりつつあるのを、知識は観望しているのである。

《注解》 本文では、観望の担い手は、われわれであったが、それが、ここでは、知る働きとされ、しかも策略とされている。この知る働きは、自己吟味を行う現象知でもある。

結びに代えて

『精神現象学』では、まだはっきりと表明しにくいだが、『論理学』では、内容の概念が二種類に区別される。一つは、形式とは別の内容で形式論理学での個別内容である。もう一つは、形式と不可分の形式そのものの内容である。これは、『論理学』の思考規定である。

凡 例

1. 原文の隔字体は、本論稿原文ではイタリック体で表記し、訳文には傍点を付した。
2. 訳文については、「精神現象学・序論」、山本信訳、岩崎武雄責任編集・解説『世界の名著 35・ヘーゲル』所収、中央公論社、昭和42年を参照した。
3. 訳文中の亀甲で括った表記は、筆者による挿入である。

Explikation der Vorrede der *Phänomenologie des Geistes* Hegels (die Absätze 51-54)

YAMAGUCHI Seiichi

Zusammenfassung

In vorliegenden Absätzen zeigt Hegel den Weg von der Kritik des Formalismus nach seinem eigen Begriff der Forms. Im 51. und 52. Absatz kritisiert Hegel den Formalismus. Weil er die Denkweise des Schelling und der Schellingschule verallgemeinert, nennt er keinen Eigennamen zu dieser Denkweise.

Nach dieser Denkweise unterscheidet sich die Form vom Inhalt. Dagegen sind nach dem 53. und 54. Absatz die Form und der Inhalt untrennbar.